

小笠原島紀事

世三

			和書門
		二九	
		三四	
		五	
		七	
三三	一	函	類

庫	文	閣	内
七三		五	和
函		三四	書
一四	三	五	
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 29345
冊數	33 (33)
函號	173 181

地七九

内一〇八八八號

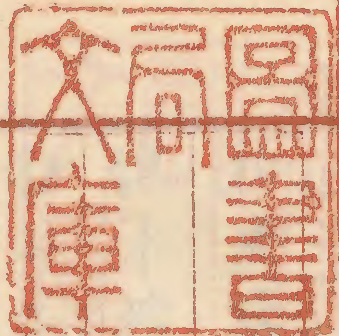
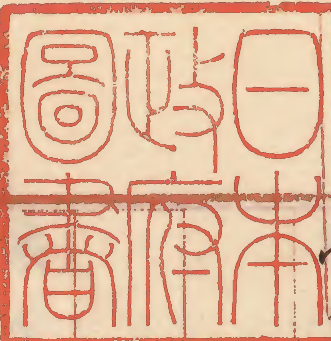
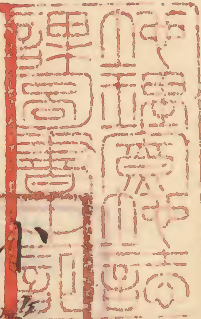




Vertical text in the left column, possibly a date or recipient information.

三十一
待理日本紀行

Handwritten characters, possibly a signature or name.



立原長紀事卷之三十一

内一〇八八八號

目錄

彼理日本紀行 無人島之部

一	...
二	...
三	...
四	...
五	...
六	...
七	...
八	...
九	...
十	...
十一	...
十二	...
十三	...
十四	...
十五	...
十六	...
十七	...
十八	...
十九	...
二十	...
二十一	...
二十二	...
二十三	...
二十四	...
二十五	...
二十六	...
二十七	...
二十八	...
二十九	...
三十	...
三十一	...

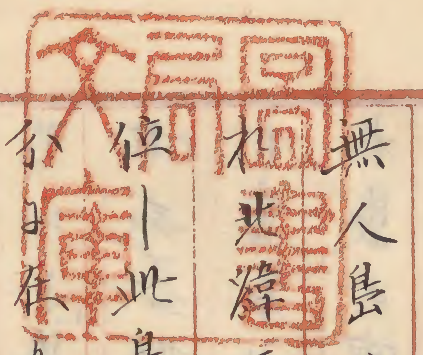
[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

彼理日本紀行卷之十 無人

内一〇八八

瀬原壽人

内田又五郎



無人島ハ日本海中ニ在テ其他形殆ト北南ニ向テ流
北緯二十六度三十分ニ二十七度四十五分ノ間ニ
在リ此島ノ心中を通スル線ハ東経百四十二度十五
分ニ在リ本島ハ一千八百二十七年英國ツ加比丹
一チエ一氏其測量家トシテ測ラシメ漫リテ其説を
以テ正説トシ既ニ名義ある事を知ラズ彼等ノ始テ
檢出セシ如ク唱ヘテ本島ノ名を命シ其北ニ在リ者

を「ハリ」群島に稱し中央に在る三島を一を「ペトル」
島其二を「ブックラン」島其三を「スタップレト」に
稱し又其南に在る者を「バイレ」島に稱す此南の「ハ
イレ」島ハ蘇獵船の船頭「ユッフイン」氏一千八百二
十三年始めて本島に到着して其地位を亞国に報告
し其名を讓て「ユッフイン」港に名けたり然るに其後
本島に何の名稱も無りければ今予天文家の碩学「フ
ランシス、バイレ」氏の姓を取て「バイレ」港に名け
しふり又「ペトル」島の大港にハ加比丹「ビィチエ」氏
既に名を命じて「ロイヤル港」にしり

本島ハ一千六百年間ハ里普く世人の知る所なるに
一千八百二十七年に至里加比丹「ビィチエ」船頭「ユ
ッフイン」氏偶島中に到着して自ら始めて検出せ
し地を諸所し地名を命ぜしハ實に面目を失ふに似
たり「ケムヘル」氏の説に遙に前代一千六百七十五年
日本人既に本島ある事を知り之を名けて「ブナ、シマ
コ」にし「ブナ、シマ」ハ人ふき島に義ふり又同氏の説
に據れハ一千六百七十五年日本船一隻大風の日に
當り八丈島より纜を解き出帆せし風を為し流を
れて偶大なる一島を發明せし此島ハ八丈島より東方

先て渡来し島中、一図を作りし人の名より取る即
 ち二百年前南亞米利加の一部を「マゲルラン」
 といふ人検出して「マガラニア」を名けし同例あり
 無人島ハ伊豆國の南東海中日本里數二百七十里
 あり在り伊豆の下用より「シヤケシマ」三宅島 まで十三
 里「シヤケシマ」より「シンシマ」新島 まで七里「シンシマ」
 より「ミコウラ」まで五里「ミコウラ」より八丈まで四
 十一里八丈より無人島の最北部まで百八十里其
 最南部に至れハ二百里又ふこいへ里
 無人島の稱をもる群島ハ北緯二十七度あり島中

の氣候甚く温和にして高山の際ハ數十の溪谷を
 生し小流滾々として漲り自然ハ肥映の地質あり
 是故ハ蠶豆小麥粟其外諸種の穀類甘蔗を生し又
 「ナニヤン」を稱する木即古巴豆樹及ハ蠟を製する
 木を生す漁獵極先て多く以て産業とふすハ
 島中ハ草木森々として繁茂すれども四足の獸類
 ハ甚く少く木ハ頗る巨大ありて一人の手にて
 抱き得ざるものあり又其高さ支那の三十尋即ち
 西洋の二百四十「ヒート」に至る者少くあらす其木
 質堅牢にして美麗なり此外「シキ」口、ツキ、
 ングリ

ナ蓋一漢一名「チヤマロプス、エキセルサ」ニ稱する

高木椰子「アレカパルム」樹支那にて「ヒ、ヨーア」ニこ

唱ふも実を生ずる木「カチラウ」樹紫檀「トーモ」漢

乎樟腦「チムツブ、ヒグス、チフ、マウンテン」山中生ずる

管状の無花 地上に横はり生ずる長春藤の葉に似

る一種の葉なる高き木肉荳蔻桑樹等の類あり

草類ハ撒兒沙巴里兒刺即ち山取米東桂「アサ、ジチ

ン、キワ」蓋一漢ニ稱する薬草等あり

鳥類ハ「パロキ」鳥の數種鷓鴣鷓鴣白鷓に類似

したる一種の鳥にて体格の長し海鳥居住す此鳥

類皆家畜つ如く徒手にて捕へ得へし

本島に生ずる礦山物の主宰ふる物ハ明礬綠礬名

色の石類及い化石の種類ふる海中に鯨魚多く又

大ふる蜷蛤大貝及い世に海中の胆に稱する「イシ

ニ」の類あり且海中より産する物品極多て多く實

に枚擧するに遑あらん

日本延宝三年西洋紀元一千六百七十五年長崎の

住人「シマエ、サエモ」島屋左衛門「ヒソ、サエモ」門「詳

マ、エ、タ、イ、ロ、サ、エ、モ」島屋太郎左衛門の三人天父地

理兩字に達したる者ふれハ江戸小網町に住す

船工棟梁ハトベゴトベゴのふ者ヲ誘引せられ支那の精
 功ふる船工ヲ造りたる一大船ヲ果リ船中の人莫
 三十名トベゴにて伊豆國下田トベゴに到る本地の海軍局より
 路稟トベゴを得て四月五日下田港を發し八丈島トベゴに碇泊
 せり夫より又南東トベゴに向て奔り八十箇の群島ヲ檢
 出す是トベゴに於て本島の密図を寫し加ふる島中の
 氣候位置及び産物を以て一今年六月二十日下田
 子帰着し圖説を上梓して之を公行せり
 右三人の上梓したる圖説トベゴミコウラトベゴの八丈の間
 子在る黒瀬河トベゴと稱する急流ある事を載ふるハ實

子怪むトベゴ此黒瀬河の幅ハ二十トベゴマツ即ち日本里
 數めて半里餘其長さハ大約一百里東より西トベゴ向
 て峻急トベゴの流トベゴ東より西トベゴ向て流るといへるハ三
 東トベゴ向此急潮冬季春季より夏季秋季トベゴ於て最
 も強しトベゴシマエトベゴ等トベゴ無人島トベゴに到るトベゴ閏四月初旬
 して其帰るトベゴや六月下旬ふれハ潮勢頗る急ふる
 故トベゴ此危き急流を知らざりしトベゴ實トベゴ怪むトベゴへま
 の至りふり

無人諸島八十箇の内トベゴ於て其最も大なるハ周圍
 十五里ふれハ壺波トベゴより少し小なり又之トベゴ次トベゴ大

ふらハ其周圍十里ふらを以て大約天州島の大小
ふり此二島の外ハ八島ハ其周圍二里乃至六七
里ハ又ふ此十島ハ平地ありて人民居住すハ又
能ク穀類を生ず島内氣候煦温ハ耕作ハ宜シ
是故ハ他洲の人ハても到り住すハ島中諸所ハ
各種の貴キ産物あり右十島の外兼爾なる七十箇
の小島ハ岩石幾々ト峙立シ一物も生シ難キ
地ふり

嘗々本島ハ罪人を送り一地を開墾シて耕作セシ
ル事アリ罪人等群居シて村落を為シ帝國日本

諸州ハ生ずる物品ニ同様の物を産せり何人ハて
も本島ハ一年ハ一度往來シ得ハければ交易忽
チ盛ふルハ至リ其裨益ハ莫大ナルハ此形勢を
以て條ハ皆推知すハ

日本安永年間即チ西洋一千七百七十一年より一
千七百八十年間予官命を受て肥前國ハ赴キ獨シ
人「アーランド、ウエルレヘート」氏ニ相交リ一時同
氏予ハ日本ハ南東ハ當リ二百里の海中ハ於テ著
作家某氏「ウーレスト、エーラント」ニ稱する島嶼の事
を唱へ圖説を示セリ「ウーレスト」ハ荒蕪の義「エーラ

外他物ふきを以て島中の土人其貯ふる所の食料を
 日本人の恵み共へしこふ人其後八年を経り一千六
 百十七年の當り佛蘭西船或る日無人島中の一島「ス
 タツフレトニ」を出帆せしむる途に離れて海岸に爛々
 として火光を放ちたるを見出しけり小船を送り
 検査せしむるに日本船破却して船中の人莫大羊溺
 死し僅に五人餘命を繋ぎ実を憫然の形勢ふりけれ
 ば佛船の將大の哀愍の心を生じ彼五人を船中に乗
 せしむる港に携へ行き遂に之を日本に送致すとい
 へり此時我の「シニスコイ」ハ「シナ」より出たる士官の

一船も偶「ス」プレトニに未着して右の船の破却せ
 し痕跡を見しこひり亦以て證にすし士官等島
 中の一小港に上陸し見し銅板銅釘等尚存在せ
 り此餘物及び其事跡を以て察するに右の船は日本
 船なる事必せり又板具など未だ腐破に至らず挫折
 にも至らざれば久しき年月を経ざる事と證とすも
 不足れ里こひり
 上は擧る鯨獵船の船頭「ロフ」氏ハ其本國を載せ
 れば何れの國の人ふもや知るべからずと雖も其姓
 字の連綴を以て考ふる時「ハ」ナ「チ」ク「ト」より出船

一 本島より列り其一港は彼、姓字を譲て「コッフィン」
 港と名けしふる一、然るも「ビ」に「ク」氏ハ本島より列
 したるこゝ大に謙遜して其名を命せず「パイレー」島
 こゝひいこを此「パイレー」島ハ土人南島と稱し無人
 島の一部に「ロ」イ「ド」港の南大約十二里洋の海中に
 在り加比丹「ビ」に「ク」氏英國の測量船「フロソム」船を
 指揮して本島より到着し之を英國王の属地とし英
 國の名稱を唱へ忘ぬしハ實に一千八百二十七年か
 り然るも土人等英國の管下ふる事を肯ては英國の
 加比丹「ビ」に「ク」氏、命したる名稱を唱ふる者も

一 之を譬ふるも「ビ」に「ク」氏北部群島中の二島を
 「ブックランド」「スタプレトン」に名けし土人等此名
 稱を唱へず「ゴ」に「ド」島「ホ」グ島に稱し類ふり英國人
 の無人島に未着して其属地にきし年月ハ銅板に彫
 刻し釘よて樹幹に固定し向り居れとも久しうら
 して消滅せり是故に英國より無人島近海に航海せ
 一 者も命し島中の上陸し近隣の岡上を登り英國の
 國旗を翻し以て英國の屬島たる事を表せしむ他人
 ちり之を見れば英船の未着を一事を報する者も如
 一 土人の島中の人民もて百事不ふれハ敢て他

ノ一人一名「マテチマザ」氏より彼理の本島に來着
キ、時尚残留セ、ハ「亞人」ナサニール、サウリ「氏」のハ
「ミルドナム」氏も尚存命ふれと「ラトロ子」のハ
群島の一島「ギムアム」小轉任す、ハ「セノ」一人「マ
サ」氏ハ既ニ物故シけれハ「サウリ」氏尚壯年ニ
テ美人ふ、其寡婦を娶リ一子を産多リ「サウリ」氏
自ら些少の田圃を耕セ、小頗る利あり、ハ「又」サ
ウリ「氏」自ら勤めて番薯を作り甘蔗を蒸餾して糖
水酒を製、本島に往來する鯨漁船小驚キ、一時ハ數
千の弗を貯蓄する小至れ、其後三四年を経て亞那

一艘來着、ハ中「サウリ」氏ハ親シキ舊老友謔諂
面諛の惡漢等を携へ來れリ「サウリ」氏ハ斯くハ
知ら以彼の舊老友に相親み貯へたる數千の弗を出
シ老友に其の地中ニ埋めたり惡漢等此事を知
りけれハ數月の間語を卑ふ、身を謀り益々「サウリ」
氏ハ謔諛、遂ニ其數千の弗を奪ひ且婦人を掠め其
家具の物品及び旅記を盗み悉く之を賣却、本島
を遁れ去たり其後惡漢等「ホノルム」よく捕縛せらる
ハ其ハ婦人身命を抛テ一言を發シ云「望ムルハ我
再び無人島に歸るの面目ハ唯弗を地中より掘り

いだしや否や之を探索せんや欲するの事と
無人島つ地形頗る高く岩石巍々として峙立し噴
火山たる事察然たり本島の水際ハ珊瑚の小片
散在し水邊より漸く丘陵の斜地を登れば回故緑地
方を生ずる青草滿地を叢生せり山上及び諸所を散
在する岩石ハ前世世界の激動より由り千形万態を顯し
之を眺望すれば城郭の如きあり塔の如きあり又巨
大小しく醜体ふる猛獸に似たるものあり島中岩石の
間ハ孔の如く門の如き通路あり其形恰も石工の鑿
を以て穿ちたるに異ならず蓋し此岩石ハ其初未だ

流動物たりし時偶雨候より其雨水山上より急し海
面より向て流れ平面を為して溝渠を生じ噴火の凌擗
より由て斯く異形を顯せし事不明なり此岩石の異形
ふるハ數百年の星霜を経て雨水より洗濯せらるるに
雖も依然として更に磨滅せし處なく頭を回らし之
を望めば某氏山上に登らんこと新し石工の命じて
堅石を切り石壇を設けし乎に疑ざる又「口」下港内
南岡の唱ふる所は於て溶化石の中を貫通する奇異
天然なる洞門ありて南岡より北岡に達す洞門の
口ハ其幅十五「口」上其高十三「口」上して屋根

の如き所ハ其高さ急ニ四十「ヒ」トあり五十「ヒ」ト
ニ登り建築家ノ穿隆形を成る者ハ如ク且絶頂ニ要
石ありて恰モ人造ノ髣髴あり且此洞門ニ海水流通
して小舟往来す〜尚許多ノ洞門あり其一ハ長さ
五十「ヤル」トあり〜本港より高さ通す〜土人常ニ
獨木舟ニ往來せり
本島ノ土質ハ礦物ニ各種ノ綠石ニ或混〜又圓柱形
ノ熔化石を含ニ加之「ホルン」フレンド礦物白瑪瑙有
里本島ニ往時噴火山タル此證多〜往昔「ペー」ル島ニ
居住せ〜者ノハ〜ハ地震地タルノ明証ニ方今

大正

ニ至リ毎年地上兩三動する事あり
「ペー」ル島ノ中央ニ〜其西部ニ在リ本
港ハ海中頗る深けれ〜船船ノ出入ニ容易ニ〜
碇泊するハ風波を防ぎ甚ニ安全ノ地ナリ碇を投ず
れハ十八尋ナリ二十ニ尋ニ達す本港ハ「ペー」ル氏
ノ海圖ニ北緯二十七度五分ニ三十五秒東經百四
十二度十一分ニ三十秒ニ在リ然れ共「シユスコー」ハ
「ル」船ノ船將ノ測リ〜所ニ東經百四十二度十六
分ニ三十秒ニ在リ以て「ペー」ル氏ノ測リ〜あり
五里東ニ在リ蓋シ「ペー」ル氏ノ謬誤ナリ本来良港

大正

と稱するハ風ある時、當り港内ハ船舶自在ニ動揺
し風下ニ向ふ程ノ深キニ廣キニ成リて入港ニ便ス
るをいふ「ヒート」氏ノ水港ノ方向を定めたる説ハ
實ニ正説なるを以て彼理氏ノ説ニ合せて之を附録
ニ載す

樹木ハ未着すハ船舶屢切取り積り去るニ雖も甚シ
多量ナリ水も亦十分ナリ流水を汲む甚シ其性良シ
居宅を建する木材ハ乏キ所ナリ若シ多人数渡来シ
て家屋を建築セハ忽古用ハ尽スハ一本島ニ生スル
樹木ノ類ハ「ヤマナ」ホニ野生桑ノ兩種ニナリ「ヤマナ」ニ

稱する木ハ「ブラシム」ホ「キシユ」ホ「ワト」ホ「ウー」ホ「ト」ホニ
類々ニ生ク永クニ堪ル木ナリ

コト「下」港又ハ其近海ハ良種ノ魚類極めて多量ナレ
共珊瑚頗多クして海中ニ列を為シ大網を引ク事
あたハ此是故ニ釣或ハ小網を以て之を捕ル漁獵ノ

良地ハ海濱ナリ珊瑚ノ列を為シたる地部ニ直接ニ
たり深キ海中ニテ「テン」ホ「ハ」ホ「ソム」ホ「ホ」ホ「ル」ホニ
すル所ニ在リ魚ノ種類ハ甚タ少ク嘗て「シユス」ホ「ユ」ホハ
ニ大「那」ホナリ大網を投セシニ僅ニ五種を得ルのみ即

古「鱒」ホ一種「鱸」ホ二種「カ」ホ「ル」ホニ一種尋常ノ鱒一種ナリ油魚

甚く多し其小なる者ハ珊瑚の間ニ遊泳し犬来りて
之を捕へ砂上ニ揚る事あり
又本島ノ海中ニ緑色ノ亀多し渡来ノ船舶多し之を
取テ食料ニ以テ又蝸^{カタ}蛤^{カニ}多し螺^{カタ}類^{カニ}極めて多けれ共珍奇
ふるハあらはにチヤマ、シカス一ニ稱する貝ハ食料ニ供
ふし然れ共硬く消化し難し其他小食ふし
貝類を見ず蟹ノ種類甚く多し其大小形状色澤各同一ふる其最
大就中陸蟹多し其大小形状色澤各同一ふる其最
も多しハ世ニ海賊^{ハイダツ}又宿借^{ヤクカリ}ニ稱する者ニ以此海賊ハ
其脊ニ或ハ白色或ハ黒色或ハ大或ハ小或ハ丸く

大正

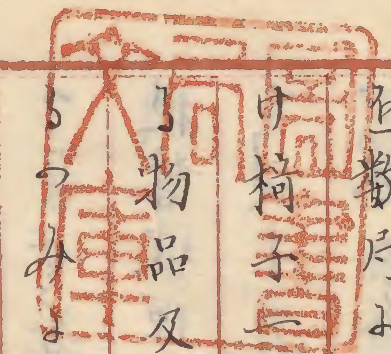
或ハ長く大小形状色澤悉く相同しからは貝殼ノ捨
れたるを見て之を奪ひ以て其住所ニし本来ノ住居
ふし是故ニ海賊^{ハイダツ}又宿借^{ヤクカリ}ノ名義あり
海陸ノ鳥類甚く少し實ニ怪むし陸上ニ住する鳥
類僅し四五種ニ過す其最大ふるハ鳥鴉ノ兩種ニし
て其他ハ皆小鳥ふり又海中ノ鳥類ハ鵝ニ他ノ一兩
種ノ海鳥のみ本島ノ近海ニ至れハ頗る巨大なり
其翼ニ光澤ある海鳥を見ることあり
四足獸ハ羊鹿豕山羊且猫犬多し猫ニ犬ニ其初め
其主たりばれ共今ハ之を失ひ原野山林ニ住しけれ

大正

ハ土人大小賤んで野獸を稱し其飼ふ所の犬を使役
し以て之を捕ふ往時「スタップルトン」島及び自餘の島
嶼に來住せし人民山羊を飼ふを植し方今に至り
「スタップルトン」の山羊異常に多く播殖せり彼理氏も
「ペール」島北部の海岸に牝牛二頭牝牛二頭を残し又
北島に上海産の圓尾羊五頭と山羊六頭を止む是れ
後日播殖せしめん為なり
無人島中にて居人の多きは「ペール」島ふれ共彼理氏
の到りし時ハ僅に三十一人の過す就中亞國人種
三四人英人三四人葡萄牙人一人其他ハ「サントウ」島

人及び本島にて出産したる兎葦ふり土人各一地を
耕し番薯玉蜀黍冬瓜葱トウモロコシ トウナス トウナス トウナス 及び諸種の菓實を植
ゆ其最も多きは西瓜バナナス未詳鳳梨未詳及此地上の
産物を豕雞鴉杯と共に貯へ置き入港したる鯨船
に驚く物品をすし「シユスコイハンナ」船本港に四五日碇
泊し間を於て亞國の鯨獵船二艘英國の鯨獵船一
艘入港して小舟を浮へ土人の許に到り食料を求め
出港せしもの下り土人焼酒製の飲料を好むを以て
本島船中を齎し來り焼酒を右の食料とを交易せり
土人筋骨を厭ふされハ尚廣く耕し得へ一方今土人

の耕作する地ハ諸所ニ散在シ多くハ海濱の低く
て海水ニ接する所ニあり又海岸の平地ニも在リ其
低き所を山上より新ふる溪水流れ来リて作物を培
養スリ其開墾したる地面島中を総計して僅ニ百五
十「ア」クレス一「ア」クレスハ我々四過才地質ハ甚た肥
腴にして本島ニ同緯度ツ「マ」テイ「ラ」カナリア西島ニ
異ふる事ふし本島ハ葡萄を作ると適地にして又小
麥烟草甘蔗及び自餘の草類を作ると妙なり土人既
ニ其自用の甘蔗烟草を植ふ事實ニ多量なり
「マ」ニ島ニ居住する人民ハ洪福にして不足ふらる



一ノ鷗洲より来往者ハ其座右ニ心思を慰め閑
化を進むるの具を備へ以て其意ニ適き居人其室内
ニ数片ニ不才支那製の畳を敷き其壁ニハ畫幅を掛
け椅子ニ兩脚を并へ食盤を出し又藍物ニ區分した
る物品及び各色の石版を備へ以て自己の鬱閉を破
くむるの一具にせり
本島ニ未仕する「サ」ニドウ「ス」人ハ航海家交易家の親
しく目撃する如く其本國ニ齊しく棕櫚を集めて屋
上を覆ひたるを以て恰も「サ」ニドウ「ス」島の一村を携

一来る者も似多り爰に居住する者ハ氣候平穩より
て身体の健康を進め且土地豊饒ふれハ僅に筋骨を
勞し飲食の乏き事なきを以て皆依然として故國の
情を起す者ふし是故に亞國人瑪洲人等「カナカ」婦人
の眞實善良なる者を撰ひ細君に居住せり
提督彼理氏本島に碇泊する事暫時ふりに雖も務め
て「ペール」島内の事跡を密に探索せんを欲しければ
一隊の人員を命じて之を分て二列にふし其一列ハ士
官「バイヤルド」タイロル氏を以て長官とし其一列ハ
副外科医官「ラス」氏を長官とし内地に入て探索

右内氏提督の命を奉り密に探索せんこの日級ふれ
忽ち旅装を整へ六月十五日早朝船中を立出けり列
のロル氏の麾下に属する者を同氏と共に八名と
即ち「バイヤルド」タイロル氏工長「ヘ」子氏傳令官「
ドマ」ン氏器械補官「ラウレン」シ氏管倉官「ハム」プ
ト
ン氏海兵「ス」ミツ氏水手「デン」ニス、タルソ氏支那人擔
夫一名ナリ「ペール」島ハ兼雨多し一小島より其長
僅に六里ふり「タイロル」ファース「内」氏にふれて檢
査する事ふれハ一日より忽ち調えんと思へり本

島ノ北部を直ニ港口ニ接ス「アリス」氏検査ノ持場
ニ於其南部を「タイロ」氏検査ノ持場ニ以即ち下ニ
述ル所ノ如ク

十五日朝日出ヨ「スエーデン」船を離レ小舟を浮
ヘ港頭ノ汲水場ニ連テ上陸シテ諸人ノ食料又ハ錫
葉を不古典ニ此時偶土着ノ「カナカ」人來リ「故嚮導
たらん事を請ムレ共肯セ」是より「カナカ」人の居所
までハ小徑ありテ一岡を越ヘ三里とソ「ハ」リ是ニ於
テ「カナカ」人の教ゆル所ニ倣ヒ行ク其路ハ滑道ニ
シテ峻急且回取線中ニ生ス草類繁茂「加之棕櫚

多く其間ニ沙穀米樹も茂リ又寄生木あり「樹枝も
り樹枝ニ渡リ恰モ網を張タル」如ク此時未タ早朝
おれハ密林叢樹ノ間より落ル白露密雨ノ降ルニ異
ならずれハ諸人皆其水皮膚ニ徹「たり」本地ノ地質
ハ「ロ」ト「港」及ビ自餘ノ地質ニ同質ニシテ壇形ノ岩
石ノ破裂セ「者」ニ草木ノ腐敗セ「者」ニ相混シテ生
セ「る」ハ「此壇形ノ岩石ト云ヘ」ハ丘陵ノ脆性
粗造ツ石大ナル橙花ノ開キ多ク「如ク破裂シテ周
圍ハ黄色を帯ビ落テ來ル者」又諸所ハ高キ
三十「ロ」ト「ハ」及フ大樹「白」花爛熳「シ」テ既に満

淵を過き地上に落して白雨の残れりう如き所あり
山上に登る道路ハ丘背よりして遂に山頂に達し其間
草木叢生し又棕櫚葉大傘を開く如き大木相接し
蔓草密網を張るに齊し日光之を為し遮られ白昼も
尚暗然として二三十フの外を洞視する事あり
をされハ道を誤りし事も少らば既に登りたれハ
丘背の側は數十の小流あり其辺りにお到れハ數千の
陸蟹足音を驚き其穴より出て奔り去る者幾千萬と
いふ数を知らず山上ハ縦横二一里若しく半里の平

面ありて波紋の如き凸凹を生し又深き溝あり山脊
の一面より深き凹路ありて甚だ峻急あり之を下る
ると一樹より一樹を傳えられハ下り難し其峩々
多し峻山の間の凹路小は諸所は禿岩あり其餘ハ悉
く青草叢生し此間一條の河流を生して岩石の上を
通し草を穿て丘陵の下に流る實に原野の好風景な
り
ハイヤルド、タイロク、氏の一列詳ヲ口未稱する木の
深林ある原野を過き之を越へて其後ろに出たり然
るに此路峻難よりして行へらざるを以て再び凹

樹林に汲り河流を渡りたる所は溪谷を隔て村落
に赴く路の覚ゆる一道路あり路傍彼此の地は番薯カニ
と煙草甘蔗冬瓜シダ一名印度産グーシベル鳥カニ
の覆盆子を植ふり其播殖實に驚く一此時四方を回
顧すれば一溪の中央に當り二本の棕櫚を以て葺く
小屋ありけりを以て其内に入り窺ひ見しに今朝ま
ても何人の住たる跡はあれ一人も其人を見ず是
に於て炮声を以て土人を誘ひ出さるやと思ひ付多れ
は火を點して一發せし忽ち大音を叫びて出て來る
者何里之を見れば南海島住の人種にして其面は薄

く藍黥イライ其身は粗製木綿の襦ハダキ衣ヒラキを著し
り此一男子自らいへるは予は本に「マルコイザス」島
の内「ニユカワ」の産にして貴き司法官ふり「マルコイ
ザス」よては高貴なる位階に見へる彼れ自ら一舎
を構へ耕作すへき一地を設けて犬数疋豕四足を飼
ひ清潔の形勢あり予等も丁寧を尽し且彼の部下も
余して親切に百事を告ぐも又自ら彼れ住む所の溪
は山稜を回り海岸の西方に至りて始て開くといへり
司法司溪流を指していへるは此河小流の如しと雖
も其水量獨木舟を浮ぶるに足る我れ今一舟を掉し

緑亀を捕へ取りし所ふり之彼れ自ら一大亀を携へ
来り之を屠りて四足の犬を呼び分古典へけれハ犬
欣然なる容貌よて忽ち喰ひ尽してけり

司法司又予等に向てソへりけるハ我れ能く諸君を
本島南部の極所ノ案内をん然るハ往来もへき道路
なく大約其里程三四里もあるらん此時司法官
一漢を呼び寄たり其名を「フタヘ」ト呼ぶ其顔
色銅色ニ齊し僅小英語を解す「フタヘ」ト自ら南
部ノ至る道を知り又能く野熊を獵すこと不然れ共
司法官行きて給ふされハ諸君之共小行く事を欲せず

と答ふ司法官其物ハ遂巡して承諾せりしハ過刻
捕へ来りし亀肉を収め終りたらハ諸君之共上南部
ノ赴人ニ同意しけるを以て予等も當然ノ事ふりこ
申たり

司法官、住む所ノ谷ハ其長を洋里小て一里其幅ハ
最も廣き所よて一里を四分するつ一ニ此谷兩三
條ノ不子予等、既ニ通行したるハ其小ふる者よて
其大ふるハ東ノ向ハ中央ノ小河あり此谷ノ南部ハ
岩石累々として恰も大堤を築きたる、如くふれハ
實ニ往來すへらす司法官、居宅ハ海濱より半里

餘の所より本地の土質ハ真土よて土人の耕作
て得る所の富穰ふを以て察すれば地味極めて肥
腴ふるを見たり煙草ハ珠の地質ハ應じて其高
五^トヒ一^ト止^ト及ふ者あり溪水ハ甘味を帯て清潔且終
年一時も絶る事ふしとある司法官其帽子ハ檜^{ヒノキ}楳^{ヒノキ}を
盛り居し故何所よて取りしやと尋し小谷の北よて
取よりと答ふ

司法官漸く亀肉を扱めたれハ「オタヘ」氏^{オタヘ}の嚮
導よて凹路の流る、溪水よ沿ひ東南東小向い立出
けり諸此水底ハ所謂壇石の碎片相累り溪邊ハ小回

取線中小生する草木及び寄生木多く茂生しけられ
樹林の稠密ふるの上質の粘滑するこゝて実ハ脚步
を進め難くて二人後れし者石里之を待んこと石よ
踏り居りしに一発の砲壺^ト聞へし故何やらんと思ひ
しハ二人来りて一足の野熊を見出し之を狙撃せし
し惜むへし中らきりしと答ふ土人の飼ふ大の樹林
よ入り野獸を驅逐するの功ふく唯其主人の左右小
のみ在るを以て山中よ連れ行ても其用を為さう、
ふり、

溪流を離れて凹路の南部よ出かれハ其道峻急し

以て司法官彼を迎へんとして馳せ行たり。忽ち坂
り来て「ハムプトン」氏ハ病魔ヲ罹て来り得ず。このふ
然るに同氏大に疲勞したれ共暫時よして快復し予
等々許し到れり。「ハムプトン」氏快復したれ共疲勞未
く残れり故同洋皆此より取られらるる勸む。キタヘー
タシに里程を問へハ島南の極所まで僅に二里に谷
ふ「ハムプトン」氏之を聞て二里ふらハ我よく行人に
つふぎらハこて彼の小熊の肝臓と腎臓とをとり其
死体をハ樹枝に掛て各南部に立出けり。
夫より大約半時を経て山脊を越へ南部斜地の絶頂

よ達す本地より左既ハ海水を見へ又正南より少し
西に當て遙に「バイレー」島の景色を聳へて見ゆ是より
尚進み行人にすする小「キタヘー」氏道を誤るる
を以て行路羊腸岩石峻急よして下るへらす又前
路に取らんにすするに峽阻よして野草滿地に業生に
葡萄せされハ取らるへらす是故に同行皆二百「ヤル
」の間に辛ふして登り漸く峽阻を過たると又急なる
下り坂ふり諸氏皆坂を脊よして滑り下り益急所よ
至れハ蔓草をカキハ或ハ地の高き所よ手を掛て急
に落さる様用心して下り漸く四路に達したれに未

海濱に流る、溪流ふく^レ十^レト^レより五十^レト^レ
の断岸有り^レ之に登り此難路を經^レれハ海邊に下
り得^レざるを以て同行皆大に歎嗟せ^レ且より或ハ先
た^レ或ハ後^レれ^レ漸く小流の側^レに下り其先^レの下の者
今尚岩稜を傳^レ以^レ嶮岨を下り来^レるを見^レれハ我^レも既^レに
彼の難路を能^レく^レ無難に下^レれ^レ至^レると思^レは^レれて實^レに身
体戰慄を催^レした^レ里

ヲ夕ヘ^レ夕^レニ^レ氏一江を指^レして^レハ之を南東江
と稱^レす鯨獵船の屢来^レる所^レにして其来^レりたるを證^レを
ん^レこ^レて大斧を以て一樹を切り其断痕を平^レし^レ今尚

存在す^レ本地の河岸に於^レて雜草^レの共^レ番茄^レの生^レを
し者^レ有り是れ自然生^レる非^レず嘗^レて人手^レよ^レて植^レし者^レ不
る^レ一^レ諸諸氏難路に悩^レみ大に疲勞^レし且炎暑焼^レる如
く^レおれ共皆一所^レに會^レし火を焚^レて今朝捕^レへたる小熊
の肝臟と腥臟^レを^レ出^レし又携^レへ行^レむ^レる豕肉^レ及び其他
の食料^レを合^レを煮^レて之を食^レひ各臨時^レの盛饌^レふれ^レの貪
りて満腹^レに至^レり疲勞^レを慰^レし休息^レしぬれ^レハ既^レに二時
に至^レて飯路^レに卦^レる人^レに^レ此時ヲ夕ヘ^レ夕^レニ^レ前路を
經^レて飯^レらん^レ云^レし故諸氏皆前路^レの艱難^レを想像^レし其
危篤^レを恐怖^レして顔色^レ凄然^レあり然^レる^レ他^レに飯^レる^レへ^レき

路ふけれハ止む事を得ず前路より取りたれハ疲労
を累ねハのみよて「チタヘ」氏等兩氏ハ誘はれ司
法官ラ居宅ハ山溪ニ取着ハけり
司法官ハ許ハ取りて時計を見れハ既ハ六時ふるを
以て同氏ハ宅よてハ実ハ暫時休息をハのみよて立
出けよハ同行ハ一人大ハ疲労ハて歩行ハ得よるを
以て「チタヘ」氏ハ頼み獨木舟よて「ロ」ト港ハ
南端「カ」カ人ハ住所ハ送り其他ハ皆今朝来りたる
陸路より取り人ハ立出たる道見ハすハて鬱林
ハ入り又雜草多ハ加之路ハ凸凹ありて困り途

中よて又同伴ハ一人大ハ疲れ歩行ハ難キハ故ハ山
上ハ平地を撰ハ一人を添て残ハ置キ「ロ」ト港ハ南
端「カ」カハ連ハ本港ハある岩上ハ座ハ本船「シ」ユス
「イ」ハ「ナ」を見れハ暗夜朦朧ハ中ハあり是ハ於て取
着を表せんハ為ハ小銃を連發ハぬれハ本船あり小
舟を浮ハ来リハ故彼疲労ハ者を迎ハ同伴悉ク之ハ
打乗り「シ」ユス「イ」ハ「ナ」ハ取りハ時ハ既ハ十時ふり
衆皆実ハ疲労を極メたり副外科医官「ス」ア「ス」氏ハ同
時ハ取着ハたり今日同氏ハ經過ハたハ途中ハ事跡
ハ左ハ述ハ所ハ如ハ

「フアース」氏等本島の地質を検査し、小諸所にて於て嘗て火眼の噴出したる痕跡を認め、其初め噴火山たりし事疑ふべし所謂壇状の石類ハ鐘乳石と緑石と相混したる物にして本島の基礎あり其丘陵に至るまで悉く此石類あり為る本地の凹路ハ一硫黄泉あり之を嗅ぎ其氣猛烈之を味ハ硫酸瓦斯なり又諸所ハ硫鉄多シ島中生する所の草木本島と同緯度の噴火地ニ在る種類と見す「ロケット」港ハ強き噴火山の噴口あり一其火を噴出するに當て方今の港口ハ周圍ハ丘陵を生じ其側ハ深き溝渠を生ず

る、如くして其坑中より溶解して流れ出る所の物品悉く溝渠あり海中ハ落ち鎮火の後一灣を生じて海水ハ灰燼の残留し水煙を漸く枯渴して唯珊瑚の残余を止め港底ハ沈在せし者ありん

本島の地形同一ふら以平地ハ丘陵の下より海岸に達し其土質ハ黒色にして植物を培養すべし糞土に其深底ハ珊瑚にして表面ハ此糞土ハ貝殻石類を混し五「ロケット」乃至六「ロケット」散在せし者あり此平地甚し肥腴にして既ハ閑望と一所ハ殆ど巨大なる番薯玉蜀黍「ヤハス」共ニ未詳「タロ」共ニ未詳西瓜野菜類殊に頗る巨大

一て良種の甘蔗を生ず嘗て「アイリス」國の薯種を齎
一未り之を植へて試みし其年月未く久しらむ
れハ地質ハ應ずるや否やを知らば江口の平地ハ開
墾古し所未く甚く些少ふれ共他所の肥腴あるを以
て察するに江口も亦肥地にして之を開くハ多人數
糊口すへき物品を生むを以ての理ふらるへし
本島ハ丘陵ハ平地より漸次ハ登る者有り又俄然こ
して急ハ登る者有り其俄然こして登る者ハ一の臺
上ハ又一臺を重ねたる如し江頭ハ屹立して相對
したる兩峯あり之を乳頭山と稱す其一山ハ一千七百

名國

太政

一ト其一山ハ一千七百トトソふ此兩峯遙々海上
より港口ハ當て見へ恰も航海客ハ港口を示す如
くふれハ實ハ航海の要峯なり「ファース」氏の検査し
たる北部半島ハ湧水少くして唯二泉のみふれ共
清淨なる飲水常ハ絶る時ふし此二泉の外溪中諸所
ハ湧泉あり共塩氣を帯ひ且乾枯するを以て頼むへ
ららば兩峯ハ溪間ハ凹路ハ數條ハ小河を生し海
中ハ落れ共河底石ふれハ晴候ハ至れハ僅ハ水氣あ
るのみふり
草木の種類ハ回取深中ハ生ずる草木ありて本島に

文

同緯度の地は米を産する者如く青々として暢茂を
呈し溪中及び海渚に一種の大木多し土人之をクリエノ
ト云ふ此木の幹は太しして灰色の皮あり其葉は
密にして枝の周囲に叢生し其葉は状ハ楕圓ありて
緑色を帯ひ表面平滑なり其花は枝端に開きて白色
なり
棕櫚ハ丘陵より左右の溪中に至るまで鬱々として
繁茂し其れハ其本体を見定め難き程にして他樹之
為に壓せられ成長し難き者なり島中に生ずる棕櫚
六種あり就中「ハンパル」ニ稱する棕櫚最も多し又

木種の内は於て頗る巨大なる山毛榉一種あり又
トクウノト大木ノ義ノ類似し多し一種の大木多く山上
に見ゆ桑樹ハ殊に多しして其周囲十三「ヒート」よ
り十四「ヒート」よ及ぶ者少らば寸矮小なる草木の類
ハ桂樹杜松柘植蕨「バナナ」橙鳳梨コウ橘キウ「ソチユス」
「モセス」其ノ義未詳又ハ寄生木の種類甚多し野草の
種類極めて少し偶多く生ずる者あり其牧畜の食料
に供し難し又未だ開墾せざる地は生きたる一種の
野草なり此草漫り繁茂して他物を生を
め

島中の数種の獸類を放ちたれども雜草の内は卧
大樹の間は往来を以て悉く野生の獸類は化し
り鳥類ハ鳩鴛鳥サントバイプルス木来住し又亀
大蜥蜴小蜥蜴多し是れ島中從來の者なるべし
右に述ぶ如くべし島ハ既し西氏に命じて検査を
しめしむるを以て提督彼理氏又士官某氏を招き「ス
プレト」島ハ地質地形及び其要件を検査せしめん
と「スプレト」島ハ亦其初噴火山にして平地丘
陵溪谷あれども開墾すべし地位少きは非ん本島の
西部ハ一小江あり海水意外に淺し其周圍ハ八十

トトより一千五百「ト」トの高山岩石直立し以て本
港の南東より来し大風を防ぐ屏障と爲る若く
如く

本江ハ小岬に珊瑚石にみちみち其周圍を繞りし北部に
接する所の岩間より清涼にして美味なる一泉を生
す其水量一時間ハ三「ガル」ロシ一ガルロシハ大
出すといふ「スプレト」島の産物も「ペ」ル諸島に
異ふる所あり唯山羊大に播殖して数千疋に及ひる
れども峻山を越へ絶壁を渡り其生路を営み来るを
以て性質悉く野獸と變りしあり

彼理氏從來亞國交場つ為よ自ら無人諸島の地形又
ひ其要件を検査せんことを企望ありし。今「ペー
ル」島を撰んて後日「カリホルニヤ」支那との間を往
来する蒸氣船の碇泊所をせん。是故に彼理氏地
形を検査し港内を探索し又後日の食料を為ん。為
め「ペール」^ル「スタップレト」二島を数足の獸類を放ち
たり。彼理氏又土人の野菜穀類の種子を與へ且後日
用ふべき農具及び獸類を放ちし所以をも土人に申
聞せたり。此外同民政廳埠頭石炭庫蒸氣船會所を設
けし地所をも撰ひ之を本國の私有に其地位を

江頭の北部より其長さ「千ヤルト」の海中に面し就
中五百「ヤルト」の海濱に接して深きところを撰ひ海
中五十「ヒ」の所に避波を設け以て大船の碇泊す
るに備ふ

提督彼理氏右の如く検査を以て亞國蒸氣船碇
泊所「ペール」島適應の地たらん事を一書し記し之
を本國の海軍局に達す其文は曰く
拙者常に太平洋海中を往復する船舶の碇泊所に集會
所を檢出し定めんと希望した。居候間此行の初
より琉球港に無人島中の良港を撰ひ碇泊所を

て恰も連環の相連り驛程の相續くゝ如く、以て飛脚蒸氣船往來する線路の休泊を備へ度候今太平洋中亞國に屬する海港の支那の海港の小蒸氣船の往來米出來をハ此盛代の歴史にも稱譽する處あり、西國并に世界萬國交易の爲に至要至切の良港に可有之存候、
合衆國の瑪羅巴の飛脚船ハ「エグレート」紅海印度海を經て一月中二週毎に日数を違へば必ず香港に達し申候香港より上海までハ五日の海路に有之候上海より「カリホルニア」まで合衆國より船を出し候

ハ、上海より瑪洲までハ海路ハ英國より船を造り必し出し可申候

蒸氣船より上海を出帆し無人島「サントウ」諸島を經て「サンフランシスコ」に達するに薪水等の爲に碇泊するを三日に定め三十日にて來着可致候是故に「サンフランシスコ」より「サントウ」島中「ホノル」に於ては里數大約二千九十三里「ホノル」より「ペール」島まで三千三百〇一里「ペール」島より上海河口「ヤンツ」に於ては里數六千四百七十五里有之候一日に二百四十里程にして海上二十七日程泊三

日之定む又「サンフランシスコ」あり「ニューヨーク」あり
二十二日程ふれハ上海あり「ニューヨーク」あり「総日数
五十二日」あり「着」可申候
英國より往路「マルセル」を経て香港小到る小ハ
其日数四十五日乃至四十八日小相成候此日数ハ香
港碇泊二日上海碇泊五日を加へ候ハ五十二日上
り五十五日まで上海に到着可列候
上海を英國蒸氣船の往来する極所と定め又亞國蒸
氣船の往来をも始と定め申候故英國船の持取
書簡ハ之を西に送りて「リヴェルポール」に達し亞國船

の持取る書簡ハ之を東に送りて「カリフォルニア」に達
し其日数大約同日に可有之候

右の船路を備へ交易の便利を得候ハ、實財を得候
利を論せし拙者世に至要ある策畧あり其名譽を可
得候又既小数十年来支那人「カリフォルニア」に渡來致
し候者其船中薪水を除くの外日費にて諸品を備へ
一人前五十弗宛に有之候

支那人ハ質朴にして能く使役し堪る性ありを以て
カリフォルニアにて農業に従事せしむ度候

上海ハ方今支那の大交易場と相成殊に合衆國と交

島を聞廣き一以来ハ、関東廣の我中候併一同國の産物
上茶類絲其外高價なる奇物を蒸気船出一五週出
て「カリホルニア」に送り八週出て「ニューヨーク」に送り
候様迅速に致し候て其利益あり也否也先見致し
難し候

亞國にて東海に交易を聞かんと欲せし無人島
ハ、實に至要なる地にして其証ハ、彼理氏叔國に
至ては尚心中に止め此書の草稿を終りて後左
の追記を編輯家に授け加入せしめし也
無人島追記

予嘗て以為らく無人島ハ太平洋中を往返する
船舶の碇泊所無ニ一適地ありと又以為らく
太平洋中無人島近海に赴く鯨漁船の薪水及び
食料を求むるの妙地加之「カリホルニア」より日
本を經て支那に航海する船舶の石炭を貯藏す
るに無二の地位ありと亦の故に予此行にむか
へ無人島にいたらざる事を得たまふにふり
無人島に亞細亞海の間於て鯨魚多く殊に日
本近海に多し帝國日本ハ獨立の國にして他國
と交通せざる國風ふれハ其手に陥り或ハ幽囚

或ハ慘刻ノ所置ヲ受人事ヲ恐レ鯨獵船モ散テ
其海濱ノ道ツク者不レ然ルヨ今日ノ至ルハ既
ニ日本ニ條約ヲ結ビ盟文アリ又不幸ヨリテ日
本海岸ニ漂着スル亞船又猛風ヲ爲シ破損シ其
修復ヲ加ヘンニテ入港スル亞船ハ親意ヲ以テ
待遇セムニシテ一ニ保證セラル衆皆更ニ恐怖ス
ル事ふラレ箱館下田兩港ニ船船修復薪水給與
ヲ爲シ既ニ開港アリ

前條ニ示スル如クある域以テ亞國ノ鯨獵船後
來ハ日本海殊ニ東海ニ於テ何ノ障得不ク安全

ニ其海濱ニ入港スヘシ然レニモ我鯨獵船ヲ日
本ノ港内ニ其國法ノ製禁不ク又其國民ノ妨障
不ク安全自由ニ出入セシメ難キ所アリ是レ一
ノ缺典ニ凡既ニ條約書ニ日本ニ於テ箱館港下
田港琉球ニ於テ那霸港ヲ開クニ雖モ皆從來鎖
國ニシテ以テ土人外國人ヲ見テ或ハ惡ム或ハ
嫉むノ風習急ニ脱シ難ク又鯨獵船ノ水夫ニ粗
暴過激不ラ故ニ實ニ急速相親和シテ交通シ
難ラヘシ是レ予ノ無人島ヲ開クノ議論ヲ主
張スル所以不リ予ノ見ヲ以テ不レハ本島ノ何

其の管轄に属する心を諭せ左に示す如く無人島中の大島「ペール」港に植民するを良策に予既し此紀行に於て詳し本島の事跡を述へ今又加ふるに人民を植へ家屋を建てる事を以てす若し予し此策を施さば後來其植民全島の播殖すへし若し予し策を決定する時ハ先数名の工匠と相謀り又同社を結ひ貯金を設け「ペール」島に植民すへしきれに其入費を恐くハ多量なるを至らざる先づ三四百噸の船二艘を作り鯨獵の用意を為し倉庫住舎を作らへし木材を積ふ

大正

送り又雜貨^{ソウモツミセ}舖海軍需用品其他鯨獵船商船に要用ふる諸品を備ふるに缺へらざる要具を送り此船「ペール」島に到着せし殖民の荷物を揚げ日本海及び其近海にて鯨魚を獵し時々本島に到るへし此二艘にて得る所の鯨油既し一艘に積むべき量に満たらば一艘ハ其鯨油を本國に輸送し役新に植民を載せ且島中にて切要なる物品を積み來り二艘にて新陣交代をへし右の如くせし殖民を久しうらにして播殖し且此事件に關係したる同社の利益を得るに至らん

一 文

此時に至らば西國英國佛國の鯨獵船一々一島
の輻輳して來往の商家よてハ船中必用の諸品
を求め農家よてハ野菜を求め工匠の家よては
修後を頼まらん若し其代料ふき時ハ右の船中小
貯ふる鯨油を取らへし

○其初本島よ到りし殖民新の別宅を構へし産
業を営むよ至るもてハ跡より到る者ハ新嫁の
者よて先居の者との同居すへき者の外ハ漫り小
到る事を許さば斯く同居とむる時ハ同教相
親しみ洪福相共よして異論ふく又故障ふく我

の教法を傳ふる基本を起すへし是よ於て傳教
師を拓き日本臺灣其他近隣未開の諸國に遣す
へし○方今サントウ井込諸島より日本海よて
鯨獵士の船船近隣に到るへき海港ふきを以て
止む事を得ず其漁獵する地あり數千里を隔て
或ハリンドウ井込島に到り或ハ香港に到て其
要品を求め又無益の金貨を失ふ金主ハ之を為
めよ大に散財し水夫ハ疾病を生し且放蕩懶惰
に陥り頗る風儀を破るに至る今ペール島を開
き碇泊所をふきハ鯨獵地所の中央ふきを以て

往來の雜費を省き且水夫等も數年間ハ耽滯地
地ニ遠きより放蕩の術を失ふハ○無人島を
其始て檢出せしハ日本人あるを以て之を管轄
する權威ハ實ニ日本ニ屬す日本より希望する
の外ハ本島を管轄するの權威必ず先づ殖民す
る者あり

無人島ニ四日碇泊して「シユスユイハンナ」サラド
カ「西船六月十八日早朝出帆して再び琉球ニ赴か
ん其儀装をを調へけり

小笠原島紀事全部三十二卷稿成第一ノ卷頗ル數紙
繙閱ニ不便ナラン事ヲ恐レ割テ乾坤二卷トナシ且
茅十九ノ卷ヨリ同二十一ノ卷ニ至ルノ三卷ハ別真
景図ニシテ共ニ總計三十三卷淨書ノ交名如左

寫字生 岩本政宜

同 庁山謙八

同 相良格次郎

同 市川 尚

試驗寫字生 上野月下

文

大正

同 安達延世

同 市川 淇

同 高田英策

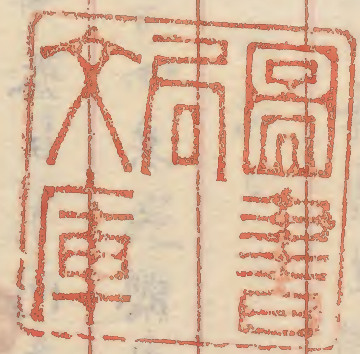
同 中村精造

画圖

外務權少録 河野雪巖

寫字生 中島政信

同 市川 島



小笠原島紀事三十三本明治七年三月十八日

小笠原島紀事三十三本明治七年八月校正

中邨元起



奉命撰述
皇朝通志
卷之二十三
禮志
十八日
外記

禮志

外記

